

かたわ者

有島武郎

青空文庫

昔^{むかし}トウロンというフランスのある町に、二人^{ふたり}のかたわ者がいました。一人^{ひとり}はめくらで一人はちんばでした。この町はなかなか大きな町で、ずいぶんたくさんのかたわ者がいましたけれども、この二人のかたわ者だけは特別に人の目をひきました。なぜだというと、ほかのかたわ者は自分の不運をなげいてなんとかしてなおりたいなおりたいと思い、人に見られるのをはずかしがって、あまり人目に立つような所にはさすがたを現わしませんでしたが、その二人のかたわ者だけは、ことさらに人の集まるような所にはきつとでしゃばるので、かたわ者といえ、この二人だけがかたわ者であるように人々は思うのでした。

いったいをいうと、トウロンという町にはかたわ者といつては一人もいないはずなのです。その理由は、この町の守り本尊^{サン}に聖マルティンというえらい聖者の木像があつて、それに願^{がん}をかけると、どんな病気でもかたわでもすくなおつてしまうからでした。ところが私の今お話しするさわぎが起こつた年から五十年ほど前に、町のおもだつた人々が、その聖者の尊像をないしよで町から持ち出して、五、六里もはなれた所にある高い山の中にかくまってしまったのです。なぜそんなことをしたかという、ヨーロッパの北の方からおびただしい海賊^{かいぞく}がやって来て、フランスのどここことなくあばれまわり、手あたりしだ

いに金銀財宝をうばって行ってしまうので、もし聖者の尊像でもぬすまれるようなことがあつたら、もつたないばかりか、町の名折れになるといので、だれも登ることのできないような険しい山のでつぺんにお移ししてしまつたのです。

それからというもの、このトウロンの町もかたわ者ができるようになつたのです。で、さつき私がお話しした二人のかたわ者、すなわち一人のめくらと一人のちんばとは、自分たちが不幸な人間だということを悲しんで、人間なみになりたいたと遠くからでも聖者に願かけをしたらよさそうなものを、そうはしないで、自分がかたわ者に生まれついたのをいいことにして、人の情けで遊んで飯を食おうという心を起こしました。

めくらの名まえをかりにジャンといい、ちんばの名まえをピエールといつておきましよう。このジャンとピエールとは初めの間は市場いちばなどに行つて、あわれな声を出して自分のかたわを売りものにして一銭二銭の合ごうりき力を願つていましたが、人々があわれがつて親切をするのをいい事にしてだんだん増長しました。そしてめくらのジャンのほうはト占者うらないしやになり、ちんばのピエールのほうは巡じゆんれい礼れいになりました。

ジャンはト占者にふさわしいようなものしい学者めいた服装ふくそうをし、目明めあきには見えぬものが見え、目明めあきには考えられないものが考えられるとふれて回つて、聖サンマルテ

インのおるすをあずかる予言者だと自分からいじりました。さらぬだに守り本尊が町にないので心細く思っていた人々は、始めのうちこそジャンの広言こうげんをばかにしていました。が、そのいう事が一つ二つあたりたりしてみると、なんだかたよりにしたい気持ちになって、しだいしだいに信者がふえ、ジャンはしまいにはたいそうな金持ちになって、町じゆう第一とも見えるような御殿ごてんを建ててそれに住まい、ぜいたくざんまいなくらしをするようになりましたが、その御殿もその中のいろいろなたから物も、聖マルティンの尊像サンがお山からお下りになつたら、一まとめにして献けんじょう上するのだといっていたものですから、だれもジャンのぜいたくざんまいをとがめ立てする人はありませんでした。そしてジャンはいつまにか金の力かねで町のおもだった人を自分の手下てしたのようにしてしまい、おそろしくえらい人間だということになってしまいました。そうなるとお金はひとりでのようにジャンのふところを目がけて集まって来ました。

ピエールはピエールで、ちがったしかたで金をためにかかりました。ピエールはジャンのようにえらいものらしくいばることをしないで、どこまでも正直でかわいそうなかたわ者らしく見せかけました。「私にはジャンのような神様から授かった不思議な力などはありません。あたりまえなけちな人間で、しかもいろいろな罪を犯しているのだから、神様

がかたわになさつたのも無理はありません。だから私は自分の罪ほろぼしに、何か自分を苦しめるようなことをして神様のおいかりをなだめなければなりません。この心持ちをあれれと思ってください」などと口ぐせのようにいいました。そこでピエールの仕事というのは大きなふくろを作つて、それに町の人々が奉納するお金や品物を入れて、ちんばを引き引き聖マルティンの尊像の安置してある険しい山に登ることでした。足の達者な人でも登れないような所に、このかたわ者が命がけて登るといふのですから、中には変だと思ふ人もありましたが、そういう人にはピエールはいつでも悲しげな顔をしてこう答えました。

「お疑いはごもつともです。けれどもいつか私の一心がどれほど強かつたかを皆様はごらんくださるでしょう。海賊がせめこんで来なくなるような時代が来て聖マルティン様から山からお下りになる時になったら、おむかいに行つた人たちは、尊像がどこにあるか知れないほど、町のかたがたの奉納品が尊像のまわりに積み上げてあるのを見ておどろきになるのでしょから」

そのことばつきがいかにもたくみなので、しまいにはそれを疑う人がなくなつて、ピエールがお山に登る時が来たということになると、だれかれとなくいろいろめずらしいもの

や金め^{かね}のかかるものをピエールのふくろの中に入れてやりました。

ピエールは山のふもとまでは行きましたが、ほんとうは一度も山に登ったことはありません。人々の奉納したものはみんな自分がぬすんでしまつて、知れないように思うままなぜいたくをしてくらしていました。

トゥロンにはたくさんのかたわ者ができた中にも、二人のえらいかたわ者がいる。一人は神様の心を知る予言者、一人は神様の忠義なしもべ、さすがにトゥロンは聖^{サン}マルティンを守り本尊とおおぐ町だけがあると、他の町々までうわさされるようになりました。

そうやっていっているうちに、海賊どもは商売がうまくいかないためか、だんだんと人数が減つていつて、めつたにフランスまではせめ入つて来なくなり、おかげでフランスの町々はまくらを高くして寝^ねることができるようになりました。

ここでトゥロンでも年寄つた人々がよりより相談して、長い間山の中にかくまつておいた尊像を町におむかえしようという事に決まりました。それにしてもその事がうっかり海賊のほうにでも聞こえれば、どんなさまたげをしないものでもないし、また一つにはいきなり町におむかえして不幸な人々に不意な喜びをさせようというので、二十人ほどの人がそつと夜中に山に登ることになりました。

そうとは知らないジャンとピエールは、かたわを売りものにしたばかりで、しこたまたくわえこんだお金を、湯水ゆみずのように使つてぜいたくぎんまいをしていましたが、尊像が山からお下りになるその日も、朝からジャンの御殿のおくに陣取じんとつて、酒を飲んだり、おいしい物を食べたりして、思うままのことをしやべり散らしていました。

ジャンがいうには、

「こうしていればかたわも重宝ちようほうなものだ。世の中のやつらは知恵ちえがないからかたわになるとしよげこんでしまつて、丈夫じやうぶな人間、あたりまえな人間になりたがっているが、おれたちはそんなばかはやできないなあ」

ピエールのいうには、

「丈夫な人間、あたりまえの人間のしていることを見る。汗水あせみずたらして一日働いても、今日今日をやつと過ごしているだけだが、おれたちはかたわなばかりで、なんにもしないで遊びながら、町の人たちがつくり上げたお金をかたつぱしからまき上げることができる。どうか死ぬまでちんばでいたいものだ」

「おれも人なみに目が見えるようになつちや大変だ。人なみになつたらおれにも何一つ仕事という仕事はできないのだから、その日から乞食こじきになるよりほかはない。もう乞食のく

らしはこりごりだ」

とジャンは相づちをうちました。

ところが戸外そとが急ににぎやかになって、町の中を狂気のように馳はせちがう人馬の足音が聞こえたと思うと、寺々のかねが勢いよく鳴りはじめました。町の人々は大きな声で賛美の歌をうたいはじめました。ジャンとピエールは朝から何がはじまったのかと思って、まどをあけて往来を見ると、年寄りも子どもも男も女も皆戸外みなそとに飛び出して、町の門の方を見やりながら物待ち顔に、口々にさけんでいます。よく聞いてみると聖マルティンの尊像がやがて山から町におはいりになるといつているのです。

それを聞いた二人は胆きんがつぶれんばかりにおどろいてしまいました。

「奉納したものが山の上に積んであると、おれのいいふらしたうそはすっかり知れてしまった。おれはもう町の人たちに殺されるにきまつている」

とピエールが頭の毛をむしると、

「おれのこの御殿もたからも今日きょうから聖マルティンのものになってしまうのだ。おれの財産は今日からなんにもなくなるのだ。聖マルティンのちくしようにめ」

とジャンはジャンで見えない目からくやし涙なみだを流します。

「でもおれは命まで取られそうなのだ」

とピエールがいうと、

「命を取られるのは、まだ一思いでいい。おれは一いちもん文なしになって、皆にばかにされて、うえ死にをしなければならぬんだ。五分切りぎ、一寸いっすんだめしも同様だ。ああこまったなあ、おまけに聖サンマルティンが町にはいれば、おれのかたわはなおるかもしれないのだ。かたわがなおつちや大変だ。おいピエール、おれを早くほかの町に連れ出してくれ」

とジャンはせかせかとピエールの方に手さぐりで近づきました。

町の中はまるで祭日の晩のようににぎやかに増さってゆくばかりです。

「とって、おれはちんばだからとても早くは歩けない……ああこまったなあ。どうかいつまでもかたわでいたいものだがなあ。じゃあジャン、おまえは私をおぶつてくれ。おまえはおれの足になってくれ、おれはおまえの目になるから」

ピエールはこういいながらジャンにいきなりおぶさりました。そしてジャンにさしずをする、ジャンはあぶない足どりながらピエールを背せ負おつていつさんに駆け出しました。

「ハレルーヤ ハレルーヤ ハレルーヤ」

という声がどよめきわたって聞こえます。

ジャンとピエールとを除いた町じゆうの病人やかたわ者は人間なみになれるよろこびの
 日が来たので、有頂天うちょうてんになって、聖マルティンサンのお着きを待ちうけています。

その間をジャンとピエールは人波にゆられながらにげようとしませんでした。

そのうちにどうでしょう。ジャンの目はすこしずつあかるくなって、綾目あやめが見えるよう
 になってきました。あれとおどろくまもなくその背せなか中でさしずをしていたピエールはいき
 なりジャンの背中から飛びおりるなり、足早にすたこらと門の反対の方に歩きだしました。
 ジャンはそれを見るとおどろいて、

「やいピエール、おまえの足はどうしたんだ」

といいますと、ピエールも始めて気がついたようにおどろいて、ジャンを見かえりなが
 ら、

「といえはおまえは目が見えるようになったのか」

と不思議がります。二人は思わずかたずをのんでたがいの顔を見かわしました。

「大変だ」

と二人はいっしょにさげびました。たくさんの人々にとりかこまれた古い聖マルティンサン
 の尊像がしずしずと近づいて来ていたのです。その御利益ごりやくで二人の病気はもうなおり始め

ていたのです。

二人のかたわ者はかたわがなおりかけたと気がつくど、ぺたんと地びたに尻もちをついてしまいました。そして二人は、

「とんでもないことになったなあ」

「情けないことになったなあ」

といい合いながら、一人は目をこすりながら、一人は足をさすりながら、おいおいといつて泣きだしました。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄」角川文庫、角川書店

1952（昭和27）年3月10日初版発行

1968（昭和43）年5月10日改版初版発行

1980（昭和55）年11月10日改版22版発行

初出：「良婦之友 創刊號」春陽堂

1922（大正11）年1月1日発行

入力：呑天

校正：きりんの手紙

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かたわ者

有島武郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>